

えらいごっちゃ、阪神タイガースが日本一になってしまった。一関西の恥」とまで言われた。タメ虎の汚名を返上、街に活気を与え、人々を燃え上がらせて、政財界のエライさんから大学の先生、下町のおっちゃんまで「これで世の中少しは変わるのちやうか」と、てんやわんやの大はしゃぎ。二カ月間、ゲームさっこのけで街の表情、ファンの姿を追ってきたわれら社会部、トラ番記者。新社会現象とまでいわれたタイガースブームは、果たして何だったのか。



西木正 池田知隆
社会部

●大トラ景気

日本シリーズ二連勝後の甲子園球場は、先月二十九日からの三連戦、ウィークデーの昼間というのに連日五万人を超える観客を記録した。スタンドはファン必携の三種の神器といわれるトラマーク入りのメガホン、ハッピー、帽子を身につけたタイガースファンで埋め尽くされ、初めから終わりまで大声援のうず。



バーゲンのトラファンも急増——シリーズ優勝のセーブルに詰めかけた主婦たち——
3日、大阪の阪神百貨店で

時代の要請だった

タイガース現象

勝つまでどうせ「虎」を開いて受けたのは九月初め。また、なんか見てやべ」とマユをひた対(関西・阪神の)町民文化で、いまや国鉄、電電をみても民間活況導入の時代。タイガースは関西企業の活力の表れ」とも言っていた。巨人的「優等生文化」に対し、「野武士」「個性派」に象徴されるタイガースは、ある「時代精神」を担っている、というのである。

●画一化光景も

その弱投猛打、アンバランスだけとパワーにあふれる個性集団。その魅力にひかれ、熱狂的に応援するあまり、いつしか「画一化」する皮肉な光景もあった。だれもかれものトラ・ファッションがそうだし、びったりと声を合わせた選手コール、ついには人文字までが登場。全体主義というつもりはないが、ちょっとともあれ、この二カ月間阪神ファンは不安です」でハラハラ、ドキドキしながら阪神の快進撃と風俗を追ってきた。しかし、一野球チームがこれほど新聞をにぎわしたことが、これまでにあつたらうか。タイガース現象は「88秋」の関西、ひいては日本を映し出す鏡のようだが、このフィーバーはどうなるのか。「反主流」が「主流」になり得るのか。独特のキャンピョータで長島茂雄さんは「阪神優勝は時代の要請」といったが、ともかく攻め野球の面白さを久方ぶりに教えてくれたのは確か。「吉田さんありがとう」。われわれ「トラ番記者」も「大甲おろし」を歌わせてもらいまっせ。



元、歳暮期の一カ月分に相当する約九十億円の売り上げになった。シリーズ優勝で再びバーゲンが始まり、三日は約三十五万人が詰めかけた。シリーズ優勝の二反中、この間、各百貨店が大反響を

「ス」を売り物に客寄せしていた。「祝優勝・半額セール」を売り物に客寄せしていた。来年は、さて巨人か西武か、このタイガース現象をどう見るか。「関西の復興」

「阪神ファンは観客であり、

関西町民文化の活力爆発 優等生破る個性派パワー

ているみたいなが格好だ。さらには、今夏、ナイター中継のためお父さんの帰宅が早まり、お母さんのファンも急増した。